様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４３０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０２７９５

研究課題名（和文）「わかる」と「できる」が拡大し，キャリアが展望できる「チーム探究」に関する研究

研究課題名（英文）Team and Inquiry based Learning: Extending Student Understanding and Competency, and Observing Career Prospects

研究代表者
乾　明紀（Inui, Akinori）

京都橘大学・経済学部・教授

研究者番号：８０５７１０３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：①京都市内の公立高校を対象とした研究では,キャリア展望が明確になる生徒は,チーム探究を通じて出会う人や図書に動機づけられ,チーム活動にも積極的である傾向にあることが示された。また,探究活動の捉え方がポジティブに変化した生徒は,高校在学中に取り組みたいことが明確になり、将来に対しても肯定的に評価する傾向があることが示された。②京都府北部地域の高校を対象とした研究では,チーム探究のさらなる展開のためには「高大社連携」,「専門部署」と「コーディネーター」の整備,「課外における探究活動」の推進も重要であることを示した。③学校横断のチーム探究の機会となる府立高校共通履修科目を共同で開発・実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の社会的および学術的意義は,主に次の3点である。①ひとつは,探究活動（とりわけチーム探究）とキャリア展望の関係を質問紙調査とインタビュー調査などから分析し,キャリア展望を明確にする生徒の特徴や,明確化を促す探究活動（支援環境含む）の特徴などを示したことである。②ふたつは,これまでほぼ皆無であった京都府北部地域などのチーム探究の実態やさらなる発展のために不可欠なコーディネーターの実態なども明らかにした点である。そして,③３つには,これらの研究成果をもとに教育委員会と共同で,学校横断のチーム探究の機会となる府立高校共通履修科目（スマートAP）を開発・実施したことである。

研究成果の概要（英文）：(1) A study of public high schools in Kyoto City showed that students who developed clearer career prospects were more motivated by the people and books they encountered through "Team-based inquiry" and tended to be more active in team activities. Students whose perception of inquiry activities changed in a positive way tended to become clearer regarding what they wanted to work on while in high school and to evaluate their future positively. (2) A study of high schools in the northern area of Kyoto Prefecture indicated that high school-university-society collaboration, the development of specialized departments and coordinators, and the promotion of extracurricular inquiry activities are also important for the further development of "Team-based inquiry". (3) Researchers and the Kyoto prefectural board of education jointly developed and implemented a common course for prefectural high schools that provides collaborative opportunities for "Team-based inquiry" among different schools.

研究分野：キャリア教育

キーワード：チーム探究　総合的な探究の時間　キャリア展望　高大連携　コーディネーター　スーパーグローバルハイスクール（SGH）　WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム　複線径路等至性アプローチ（TEA）

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

21 世紀の教育を展望し，1999 年の学習指導要領（高等学校）において，「生きる力」の育成のために創設されたのが「総合的な学習の時間」（以下「総学」）である。しかしながら，先進的な実践が生まれたと評価される一方で，生きる力の育成が実質化されていないとの指摘がある。その要因として，少子化による学校間の競争が一層激化する中，教員や学校が「深い学び」より短期的な利益を追求する「学びの貧困化」（小安，2008）があげられる。

このような学校文化の形成は，生徒のキャリア意識にも負の影響を与えることが予想され，学校文化の変革と教育の実質化が求められている。この点を踏まえ，2018 年の新学習指導要領では，「総学」は「総合的な探究の時間」（以下「総探」）に改訂され，「自己の在り方生き方を考えながら，よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力」の育成が目標とされた。つまり，生徒は「総探」を通じて，キャリア形成と課題解決の２つを探究していくことになる。

さらに好ましくない状況として－わが国の「総学」が低調であることに比例して－生徒の２つの探究プロセスを実証的に検討した学術研究は極めて少ない。今後，多くの高校で「チーム活動による探究活動」（「チーム探究」）の実施が予想されるが，研究的蓄積は十分とは言えない。

一方，全国の高校 2 年生 4.5 万人を対象に，10 年間の追跡調査をおこなう「10 年トランジション調査」（溝上,2018）がおこなわれている。その研究成果によれば，高校 2 年生の段階で，キャリア意識が高く，対人関係や自尊感情が良好で，授業外学習も積極的な生徒は，大学入学後も主体的に学び，資質や能力を伸ばしていることが示された。今後，このような高校生をいかに育てるかが，高校教育における重要なテーマになる。

２．研究の目的

溝上（2018）が指摘したような伸びる高校２年生は，どのようにしたら育つのか。この実践的かつ学術的な関心を起点とし，多くの高校で実践が予想される「チーム探究」において，「そのチームに緩やかに所属する生徒が，活動目標に向かって他者と協同しつつ，自らの知識・理解（わかる）と行動（できる）の拡大に積極的に関与し，その拡大を通じてキャリア形成への展望を見出していくアクティブラーナーになる（図 1）ために必要な支援は，どのようなものか」が，本研究の核心的問いである。

この問いに先立ち，研究代表者らは 2013 年度から 3 か年に渡り「『緩やかな所属による組織活動』におけるキャリア・アップ支援に関する研究」（基盤研究(C)25380805）をおこない，当事者が自律的に行動選択肢を拡大していくための環境設定（「他立的自律」（望月・サトウら,2010）のあり方を検討してきた。そして，2016 年度からは，その研究の蓄積を基盤に，研究協力校である A 高校のスーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）の「チーム探究」のプログラム開発をおこなってきた。同校では，探究意欲やキャリア意欲に向上がみられ，2017 年度の文科省の SGH 中間評価では，公立高校で唯一最高評価を得た。また，A 校以外の複数高校においても「チーム探究」プログラムの開発に携わり，一部の授業を担当するなどのかかわりをもってきた。

このような豊かな実践によって生徒たちはどのように変容したのだろうか。この点が明らかになれば，より多くの高校で実践が可能となるはずであり研究の価値がある。

以上を踏まえ，本研究の目的は，「チーム探究」をどのように支援すれば，生徒をキャリアも展望できるアクティブラーナーに変容させられるかを明らかにすることである。

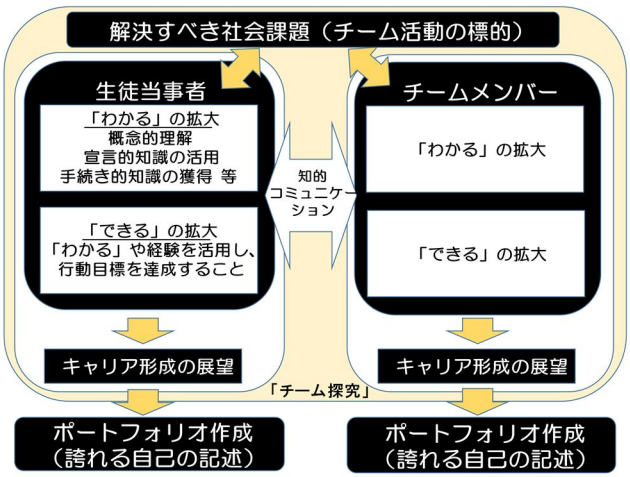

図１：チーム探究のイメージ（申請時のもの）

３．研究の方法

【研究 1】は，京都市内の公立高校 3 校の探究活動を概観し，「チーム探究」における生徒の変容や探究活動とキャリア展望の関係などを分析するものである。A 高校グローバル科に加え，高大連携による「実践研究共同教育プログラム」（大学コンソーシアム京都高大連携事業）として探究活動が始まった B 高校と高大連携による講義と連動した探究活動をおこなう C 高校を研究協力校とした。

SGH 指定校である A 高校では，質問紙調査とインタビュー調査により変容過程を確認した。インタビュー調査の分析には，文化心理学の新しい方法論である「複線径路等至性アプローチ（TEA）」（木戸・サトウ，2019；サトウら，2019）を用いた。また，B・C 高校については，主に質問紙調

査にて，生徒の変容過程を確認した。なお，いずれの高校も本研究の研究者（以下研究者）が，教育プログラムの開発に関わり，複数年にわたり授業を担当している。

【研究２】は，多様な「チーム探究」のあり様を確認するために，地域経済・社会の衰退が懸念されている京都府北部地域の高校に着目し，分析を加えた。具体的には，京都府北部地域でいち早く高大連携による探究活動を実施してきたＤ高校，「総探」や課外活動において高大連携による探究活動をおこない全国的な実績を残しているＥ高校，そして，高校の魅力化コーディネーターを採用し，基礎自治体とも連携しながら高大連携による探究活動をおこなう F 高校の公立３校を対象とし，学校長へのインタビュー調査から現状分析と比較検討をおこなった。
さらに，北近畿地域にて活動する地域と高校をつなぐ 11 名のコーディネーターにもインタビュー調査をおこない現状と課題を分析した。

【研究 3】は，学校横断のチーム探究を対象とした研究である。A 高校での実践結果をもとに研究者と教育委員会が共同で教育プログラムを開発し，府立高校の共通履修科目「スマート AP」として開講・実施した。また，研究者はその授業の一部を担当しているため，アクションリサーチ型の研究といえる。

４．研究成果

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により，当初の研究計画に基づく調査の一部が実行できなかったものの，以下の成果を得た。

【研究１】

A 高校グローバル科第１学年を対象とした研究（乾ら，2020）では，第１学年における「チーム探究」の促進要因として「他者と互恵的で相互依存的な協働（協同）関係の実感」と「具体的な技術獲得と能力開発に対する期待と実感」があることを示した。また，「チーム探究」の下支えとして，「学習効果の実感」，「教科学習との両立と関連付け」，「教員からの適切な支援」が重要であることを示した。一方，第１学年の「チーム探究」では「キャリア形成の探究は限定的」であった。
また，第 2 学年を対象とした研究（乾ら，2022）では，探究活動によってキャリア展望が明確になった生徒とそうでない生徒を比較した。その結果，前者は研究内容に加え「チーム探究」を通した人や図書との出会いに動機づけられながら，チームへの関与や貢献が高く，「率先垂範」，「挑戦」，「目標共有」，「対人志向支援」，「成果志向支援」，「目標管理」に関する行動を積極的に行っていることを示した。また，その傾向は第１学年から継続したものであった。
一方，後者は調査などの技術（技法）習得には価値を感じてはいるものの研究を通じた新たな出会いへの関心が低い。また，チーム活動への関与はやや積極性に欠け，課せられた課題であるからという義務的な動機で探究活動を行う傾向にあった。そして，「目標共有」と「目標管理」に関する行動が第 1 学年よりも低下していることを示した。
さらに，「複線径路等至性アプローチ」（TEA）を用いた質的研究（乾・高野，2022：乾・サトウ，2023）では，生徒が探究活動との関係の中でキャリア展望を明確化していくプロセスを示した。
B・C 高校の第 2・3 学年を対象とした研究（高野ら，2021）では，いずれも学年進行に伴い生徒の探究学習に対する捉え方は向上する可能性があることを示した。また，探究活動の内容によりその変動幅が異なる可能性があり，やや難易度の高いフィールドワークに初めて取り組むことになる B 高校第 2 学年の印象は，3 校中最もネガティブなものであった。しかし，第 3 学年の印象は他校同様にポジティブなものであった。このような肯定的な変化の背景に高大連携による環境設定などがあることが，教育雑誌（リクルート進学総研，2021）にも紹介された。また，第 2 学年にチーム探究をおこない，第３学年に個人で卒業論文を制作する C 高校では，第３学年の生徒がチームより個人での探究活動を志向する傾向があった。
学年間の全体比較ではなく，個人の捉え方の変動幅に着目し，その差分により 3 群（ポジティブ変化群・ネガティブ変化群・ニュートラル群）に区分して比較した研究（高野・乾，2022）では，ポジティブ変化群ほど，「他者と協同して活動すること」に対して肯定的に変化し，「高校在学中に熱心に取り組みたいこと」についても，より明確になる傾向が示された。また，「将来に対してより良いイメージを抱き，それに向かって行動することができるか」についても有意傾向にあった。

【研究２】

京都府北部地域の高大連携の取組みを整理し，D・E・F の 3 高校の探究活動を比較検討した研究（杉岡，2022）では，高大連携による探究活動（学習）の今後の展開への示唆として，次の 3 点を導出した。１点目は，カウンターパートの多様性，言葉を換えれば「高大社連携」という視点の重要性である。２点目は「専門部署」と「コーディネーター」の必要性である。３点目は，部活動など課外における探究活動の重要性である。
また，近畿地域における高校と地域との連携・協働のためのコーディネーターについての研究（杉岡，2023）では，コーディネーターをめぐる課題として，①報酬をめぐる課題と持続可能性

（身分保障）をめぐる課題，②人数（の少なさ）をめぐる課題，③募集要項と実態のギャップをめぐる課題，④働き方をめぐる課題と情報環境に関する課題，⑤高校教員の人事をめぐる課題と人材育成をめぐる課題の５点を抽出した。

【研究３】

Ａ高校のチーム探究などが評価され，同校をカリキュラム拠点校とするコンソーシアム形成の取組みが WWL（ワールドワイドラーニング）コンソーシアム支援事業（以下 WWL）に採択された。京都府教育委員会は，WWL として，大学での学修の先取り履修相当の探究活動プログラムの提供を構想し，研究者と協働で府立高校共通履修科目「スマートＡＰ」を開発・実施した（京都高大連携研究協議会，2023）。この過程を通じて，以下の３点の成果を得た。１点目は，大学での研究活動やプロジェクト学習（PBL）から逆算したチーム探究プログラムが開発できたことである。２点目は，開発した教育プログラムをもとに各高校が参照可能な実践録（京都府教育委員会，2023）を作成し公開したことである。３点目は，チーム探究における質の高い問いの生成には，図２で示した授業内チーム活動と授業外個人活動の実施が重要であることが実践において確認された。

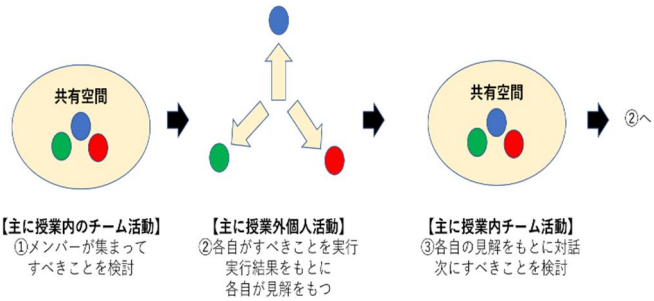

図２：問いの質を向上させたチーム探究プロセス

＜引用文献＞

- 乾明紀・高野拓樹（2022）質的調査から見えてきた高校生の探究活動とキャリア展望の関係，日本総合学習・探究学習学会第 31 回全国大会（広島・三原大会）大会紀要，142.
- 乾明紀・田中誠樹・竹林祥子・大泉幸寛・宮﨑雄史郎・ミューリ ニコラス・久保友美・杉岡秀紀・高野拓樹・サトウタツヤ（2020）チームで探究活動を行う生徒から見た総合学習の促進要因と課題（１）：京都府立鳥羽高校のイノベーション探究Ｉの実践から，京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要，58，123-141.
- 乾明紀・田中誠樹・竹林祥子・大泉幸寛・ミューリ ニコラス・杉岡秀紀・高野拓樹・サトウタツヤ（2022）キャリアを展望できる探究活動の特徴：京都府立鳥羽高等学校イノベーション探究Ⅱの実践から，京都橘大学研究紀要，48，95-113.
- 乾明紀・サトウタツヤ（2023）高校生のキャリア展望と「総合的な探究の時間」の関係：複線径路等至性アプローチ（TEA）と関係学による検討，京都橘大学研究紀要，49，171-193.
- 木戸彩恵・サトウタツヤ編集（2019）文化心理学：理論・各論・方法論，ちとせプレス.
- 京都高大連携研究協議会（2023）第 20 回高大連携教育フォーラム報告集「2020 年代を通じて実現すべき高大連携―生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために―」
- サトウタツヤ（編）・春日秀朗（編）・神崎真実（編）ワードマップ 質的研究法マッピング，新曜社.
- 子安潤（2008）学びの貧困化に立ち向かう，高校生活指導，178，66-73.
- 高野拓樹・松原久・糟野譲司・乾明紀・久保友美・杉岡秀紀・サトウタツヤ（2021）高大連携型教育を用いた探究学習に関する実践的研究：探究学習に対する生徒のイメージやスキルに影響を及ぼす要因，京都大学学際融合教育研究推進センター地域連携教育研究推進ユニット「地域連携教育研究」，6，33-49.
- 高野拓樹・乾明紀（2022）「わかる」と「できる」が拡大し,キャリアが展望できる「チーム探究」に関する研究 第三報:生徒が探究学習に抱くイメージと自分の将来に対する意識の関係，日本総合学習・探究学習学会第 31 回全国大会（広島・三原大会）大会紀要，115.
- 杉岡秀紀（2022）高大連携による探究的な学習についての現状と課題：京都府北部の公立高校の事例研究を踏まえて，福知山公立大学研究紀要，6，93-120.
- 杉岡秀紀（2023）高校と地域との連携・協働のためのコーディネーターについての研究：北近畿地域の高等学校を事例として，福知山公立大学研究紀要，7，91 – 120.
- 溝上慎一（責任編集）・京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）（2018）．どんな高校生が大学，社会で成長するのか②：高大接続の本質「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題，学事出版.
- 望月昭・サトウタツヤ・中村正・武藤崇編（2010）対人援助学の可能性，福村出版.
- リクルート進学総研（2021）Case　生徒の“学び”と“成長”をつなぐ，高大連携事例①北稜高校＆京都光華大学　https://souken.shingakunet.com/secondary/2021/10/case1.html.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計22件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　13件）

１．著者名 乾明紀・サトウタツヤ	４．巻 49
２．論文標題 高校生のキャリア展望と「総合的な探究の時間」の関係：複線径路等至性アプローチ（TEA）と関係学による検討	５．発行年 2023年
３．雑誌名 京都橘大学研究紀要	６．最初と最後の頁 171-193
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 乾明紀	４．巻 13
２．論文標題 対人援助学の視点からキャリア発達支援を再考する	５．発行年 2023年
３．雑誌名 対人援助学会研究	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 杉岡秀紀	４．巻 7
２．論文標題 高校と地域との連携・協働のためのコーディネーターについての研究：北近畿地域の高等学校を事例として	５．発行年 2023年
３．雑誌名 福知山公立大学研究紀要	６．最初と最後の頁 91-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Tsuchimoto Teppei, Sato Tatsuya	４．巻 －
２．論文標題 Career decision-making as dynamic semiosis: Autoethnographic trajectory equifinality modeling	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Culture & Psychology	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/1354067X221140609	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 乾明紀・田中誠樹・竹林祥子・大泉幸寛・宮﨑雄史郎・ ミューリ ニコラス・杉岡秀紀・高野拓樹・サトウ タツヤ	4．巻 48
2．論文標題 キャリを展望できる探究活動の特徴：京都府立鳥羽高等学校イノベーション探究Ⅱの実践から	5．発行年 2022年
3．雑誌名 京都橘大学研究紀要	6．最初と最後の頁 95-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 杉岡秀紀	4．巻 6（1）
2．論文標題 高大連携による探究的な学習についての現状と課題：京都府北部の公立高校の事例研究を踏まえて	5．発行年 2022年
3．雑誌名 福知山公立大学研究紀要	6．最初と最後の頁 93-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 サトウタツヤ	4．巻 38(1)
2．論文標題 ナラティブの心理学	5．発行年 2021年
3．雑誌名 コミュニケーション障害学	6．最初と最後の頁 75-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 乾明紀，田中誠樹，竹林祥子，大泉幸寛，宮﨑雄史郎，ミューリ ニコラス，久保友美，杉岡秀紀，高野拓樹，サトウ タツヤ	4．巻 58
2．論文標題 チームで探究活動を行う生徒から見た総合学習の促進要因と課題（１）－京都府立鳥羽高校のイノベーション探究Ⅰの実践から－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要	6．最初と最後の頁 123-141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 高野 拓樹、松原 久、糟野 譲司、乾 明紀、久保 友美、杉岡 秀紀、サトウ タツヤ	4．巻 6
2．論文標題 <論文>高大連携型教育を用いた探究学習に関する実践的研究 --探究学習に対する生徒のイメージやスキルに影響を及ぼす要因--	5．発行年 2021年
3．雑誌名 地域連携教育研究	6．最初と最後の頁 33～49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/JERRA_6_33	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 土元哲平・サトウタツヤ	4．巻 42
2．論文標題 キャリアと文化の心理学(1) 教育・発達心理学とキャリア教育の接合	5．発行年 2020年
3．雑誌名 対人援助学マガジン	6．最初と最後の頁 288-302
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 杉岡秀紀	4．巻 15（2）
2．論文標題 京都における産学連携によるグローカル人材育成事例	5．発行年 2019年
3．雑誌名 産学連携学	6．最初と最後の頁 44‐54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11305/jjsip.15.2_2_44	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 土元哲平・サトウタツヤ	4．巻 37（2）
2．論文標題 転機研究における「個人と社会との相互作用」のアプローチ	5．発行年 2019年
3．雑誌名 キャリア教育研究	6．最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20757/jssce.37.2_35	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 土元哲平・小田友理恵・サトウタツヤ	４．巻 19
２．論文標題 成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚：TAEステップを用いた理論構築	５．発行年 2020年
３．雑誌名 質的心理学研究	６．最初と最後の頁 46-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 乾明紀・高野拓樹
２．発表標題 質的調査から見えてきた高校生の探究活動とキャリア展望の関係
３．学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会全国大会第31回［広島・三原大会］大会 日本生活科・総合的学習教育学会全国大会第31回［広島・三原大会］大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 高野拓樹・乾明紀
２．発表標題 「わかる」と「できる」が拡大し、キャリアが展望できる「チーム探究」に関する研究 第三報：個々の生徒の探究学習に抱くイメージと自分の将来に対する意識の関係
３．学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会全国大会第31回［広島・三原大会］大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 Akinori Inui
２．発表標題 The relationship between career prospects of high school students and Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study: A case study based on the Trajectory Equifinality Approach (TEA) and relationship science
３．学会等名 The 5th Transnational Meeting on TEA（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Tatsuya Sato
２．発表標題 Encounter of TEA and Relational Studies(TEAと関係学の邂逅)
３．学会等名 The 5th Transnational Meeting on TEA（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 杉岡秀紀
２．発表標題 高大連携による探究的な学習についての現状と課題ー京都府北部の公立高校の事例研究を踏まえてー
３．学会等名 日本地域政策学会2022年度第21回全国大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 乾明紀・田中誠樹・竹林祥子・大泉幸寛・杉岡秀紀・高野拓樹・サトウ タツヤ
２．発表標題 チームによる探究活動が高校生のキャリア展望に与える影響
３．学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会第29回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 乾明紀
２．発表標題 探究的な学びのねらいとは？
３．学会等名 京都府高等学校商業教育研究会 令和３年度 冬季研修会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 高野拓樹・糟野譲司・松原久・乾明紀・杉岡秀紀・サトウタツヤ
２．発表標題 「わかる」と「できる」が拡大し、キャリアが展望できる「チーム探究」に関する研究 第二報：学年進行に伴う生徒が探究学習に抱くイメージの変容6月19日遠隔確定
３．学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会第29回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高野拓樹，乾明紀，久保友美，杉岡秀紀，サトウタツヤ
２．発表標題 「わかる」と「できる」が拡大し、キャリアが展望できる「チーム探究」に関する研究 第一報：環境・防災教育およびSDGs教育を通じた探究学習における課題の整理
３．学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会第29回全国大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 宮下太陽・サトウタツヤ
２．発表標題 TEAによるキャリア転換経験の分析―分岐ゾーンにおける人と記号の調整過程に焦点をあてて
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Taiyo Miyashita and Tatsuya Sato
２．発表標題 Analysis of Bifurcation Zones in Career Transition
３．学会等名 台湾心理学会59回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 宮下太陽・サトウタツヤ
２．発表標題 キャリアの分岐ゾーンにおけるTLMGとイマジネーション
３．学会等名 日本キャリア教育学会第42回研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 高野拓樹・松原久・糟野譲司
２．発表標題 ESDの観点からの高大連携型環境教育の実践
３．学会等名 日本生活科・総合的学習教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 サトウタツヤ
２．発表標題 質的研究において「意味」を問う方法
３．学会等名 本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計8件

１．著者名 サトウ タツヤ（監修）・安田 裕子（監修）	４．発行年 2023年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 112
３．書名 カタログTEA（複線径路等至性アプローチ）	

１．著者名 安田 裕子（編著）・サトウ タツヤ（編著）	４．発行年 2022年
２．出版社 誠信書房	５．総ページ数 254
３．書名 ＴＥＡによる対人援助プロセスと分岐の記述	

１．著者名 Sato T., Tsuchimoto T., Yasuda Y., Kido A.（分担執筆者）	４．発行年 2021年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 488
３．書名 Culture as Process　2021	

１．著者名 村田和代（編）	４．発行年 2020年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 272
３．書名 これからの話し合いを考えよう	

１．著者名 竹尾和子(編)・井藤元(編)	４．発行年 2020年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 276
３．書名 ワークで学ぶ発達と教育の心理学	

１．著者名 サトウタツヤ（編）・春日秀朗（編）・神崎真実（編）	４．発行年 2019年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 292
３．書名 ワードマップ 質的研究法マッピング	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	高野　拓樹 (Takano Hiroki) (10444241)	京都光華女子大学・キャリア形成学部・教授 (34307)	
研究分担者	杉岡　秀紀 (Sugioka Hidenori) (10631442)	福知山公立大学・地域経営学部・准教授 (24304)	
研究分担者	佐藤　達哉 (Sato Tatsuya) (90215806)	立命館大学・総合心理学部・教授 (34315)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関